

武蔵野市第四期基本構想・長期計画テーマ別市民会議

「団塊世代の主張」 第2回会議 会議要録

日 時：平成16年1月27日（火） 午後7時～9時

場 所：武蔵野スイングホール スカイルーム1・2

出席委員：7名

1 開会

2 意見交換

委員：前回の議事要録から抜き出したキーワードが付箋に書かれているので、発言者の方はこれらをもとに議論を発展させてほしい。その後に分類を試み、行政への提言が見つければよいと思う。

委員：ところで、前回では今ひとつわからなかったのだが、この会議の結果、どのようなものができ、どう活かされるのだろうか。というのも、これからワークショップをしようとしているが、この方法によると通常、個々の発言の特徴が平準化され、この会議の存在感が小さくなるように思える。そういった平均的なものはアンケートなどでも出せるわけで、もう少し個人的な意見をそのままにひろっていき、そこでの違いについて話し合っていく中で、行政につなげられればよりよいと思うのだが。

委員：はじめからゴールを具体的には決めずに、自由に意見を出し合う中で、行政での仕掛けにつながるものが見つかるかもしれない。そういったものが出来れば、それはしっかりとまとめていきたい。

ワークショップ開始 発言者（委員）ごとに貼付されている付箋（キーワード）を全員でカテゴリーごとに分類し、さらに追加のキーワードを作成する

委員：このように、「生きがい」「健康」「家族」「仕事」「コミュニティ」「その他」とまとめてみた。

委員：このなかには、行政の目から見て、関わられるもの、そうでないものがある。いずれも最後は「生きがい」に結びつきそうな気はする。

委員：いずれも大事なキーワードだと思う。ここからさらに、例えば「健康」について突っ込んだ意見を出す、ということをしてはどうか。「健康」以外のものでもかまわないが。

委員：「生きがい」は結構ふくらみがありそうだ。いろいろ出てきそうだ。

委員：「健康」は全てのベースになりそうだ。

委員：「健康」について今あがってきているのは、「死ぬまで健康に」「介護予防」など。また、これらに関して「自助努力」「地域社会とのかかわり」「いろんな事へのチャレンジ」もあがっている。こういったことをできる仕掛けを行政がつくることも考えられる。「健康診断」もキーワードとして重要だろう。

委員：武蔵野市には施設は整っている。その気になれば健康づくりはできる。ただ、個人的な意見だけでも、個人スポーツの施設はあるが、団体スポーツの場合はチャンスが少ないように思える。

委員：市民参加の健康講座とか、体育館とか。結構あるが、団塊の世代が利用するようになって、収容しきれぬかどうか。あと、そこに集まるだろうか。行きやすいしくみになっているだろうか。私は現在勤め人なので行く時間はないが、将来、時間ができたときに例えば体育館に行きやすくなっているだろうか。

委員：現状では行きにくいことは、ないと思う。

委員：例えば、スポーツジムは民間業者が数多く作っているが、市のものはどうだろうか。

委員：武蔵野市の場合も立派なものはあるようだ。ただ、「居場所」としては……。施設を利用しようとしたときに、「団体スポーツの場」があれば私としてはいいかなと思う。例えば野球をする場など、あればいいかなと思う。そういう欲求を持つ人は多いのではないだろうか。

委員：コミセンなどもそういう「場」に入るだろうか。

委員：私としては、コミセンにはなかなか入りにくい。いろいろサークルはある。あるが年上の方が多くかつ元気で、ちょっと入りにくい。

委員：私のコミセンのイメージは、少し暗いかな、と思う。例えば喫茶店のような外観があると、少し違うような気もするが。

委員：私が普段見ているコミセンについては、そうでもなく、結構皆さん楽しそうにいろんな事をやっているようだ。

委員：学生がたまに使っていることもあるが、暗い感じではなさそうだ。

委員：世代の違いを感じる。同世代が多いと、入りやすさはあるだろう。

委員：私は「健康」は自分で気をつけることかなと思う。まずは一人一人が病気を予防するために何かしらすべきで、その方法として一人一人が健康診断を受け、さらにその結果から健康についての講習、たとえば糖尿病予防についての注意などを受け、それによって市民が健康について意識を高めるのがよいかと思う。千代田区あたりで「歩きタバコ禁止」だったか、施行されているが、そういったことも市民の健康についての意識を高める方法としては、武蔵野市でも考慮してもよいのではないかな。

委員：今、武蔵野市では年1回健康診断が行われている。これは無料のようだ。企業勤めの方は会社でやるようだが、保健センターが主催で健康講座もやっているようだ。ただ、講座があるのがウイークデーの昼間だったりするようだが……。そのあたりには、改善の余地はあるかもしれない。

委員：健康は自分で守る、というのは私も同感だ。私も去年会社を辞めたが、会社にいた頃は人間ドックを受けていた。これからは、市の健診が頼りになるだろう。名前が「老人健診」だっただろうか、それには少し引かかる。70歳でも「老人」というにはあまりに元気な人もいる。

委員：私が「新しい職種」「モデル化して販売」「ビジネス化」を「健康」に入れた。これらは「仕事」に入れてもよいはずのものだが、例えば団塊世代が定年を迎えて地域社会に帰ってきたときに、今まで蓄積したノウハウを、地域に活かすことが、実は健康にもいいのではないだろうか、というあたりを意識して入れたものである。会社人間はストレスにさらされている。コレステロールが溜まったり、ガンになったりするの、そういったところから来るのではないだろうか。健康になる仕事というのは、そういったストレスなしに、仕事ではあるがより爽快な気分になるような、そういったものではないだろうか。市のシステムにも、そういったものが取り入れられればと思う。

委員：市のシステムに取り入れたいビジネスモデル、というところですか。

委員：いや、どちらかといえば趣味に近いかもしれない。

委員：やりたいことができることが健康に近づくためには必要、といったところだろうか。

委員：「コミュニティ」についてはどうか。居場所作り、ネットワーク、などいろいろなキーワードが出ている。青少年、ボランティア、などは行政的なアプローチのしやすそうなものに思える。一方、「同世代の集まる場がない」、などのキーワードもある。

委員：「地域に戻る」というのも違うようだ。というのも、団塊世代は今まで地域にいなかったとも言えるから。地域を新たに「発見」というのがより実感に近いだろう。町内の何かの班長になれば

また違うのだろうが、それでもなければ特に働いている間は地域とのかかわりを実感することはなかなかない。働くのが終わった後に、「戻る」地域ではないように思える。

委員：大半の方はあまりお金をかけずにいると思うので、地域で集まればよいとは思う。

委員：ものすごい発見、といえるかどうか。私は最近コミュニティセンターをいろいろ回ってみたのだが、一つだけすごく豪華なところがある。なぜここだけすごく雰囲気がいいのだろうか。こういったものを見つけるといろいろ考えさせられる。頭が活性化する、という点ではまた一つ意味があるが、ところであれはなんでだろう。

委員：おそらくけやきコミセンだと思う。私の家の近くにあるが、あれを作るにあたっては、周りの住民の方が設計段階から日常の運営まで関わることをしているようだ。それが他のコミセンと違う要因ではないだろうか。

委員：住民が運営している。

委員：そのようだ。

委員：私は仕事をやめてから、月に何回か、仲間と集まったりすることがある。とはいえ、仲間は働いているので私が都心まで出て行くことになる。そういうことも考えると、やはり地域社会でいろいろできる仲間がいればいいなあ、と思い、「ネットワーク」という言葉で表してみた。

委員：集まるきっかけはなんだろう。

委員：やはり趣味だろうか。それも個人的なものより集団的なもの。

委員：市は「飲み屋」のようなものをやってはいけない何か決まりのようなものはあるのだろうか。というも、これは「健康」についての一つの考えだが、いわゆるテニスコートのようなものばかりではなく、飲み屋、焼鳥屋などの「気軽に人が集えてコミュニケーションしやすい環境」を市が提供するの「健康」につながるのではないか。またそこから収益を得るようにすれば、新たなお金もかからない。

委員：ボランティアの仕組みづくりについて。テレホンボランティアというものがあるようだ。これは一時に何千軒かの家にかけて、「こちらはテレホンボランティアです、ボランティアに興味のある人はこのままお聞きください……」などとボランティアを勧誘するしかけのようだ。これはマーケティングの一方法のようだが、この「ボランティア」には、例えば「あなたは飲み屋に興味がありますか」などといった質問に置き換えることもできる。

委員：中高年のお付き合いクラブがあったらどうですか、といった感じにもなるだろうか。いま、そういうところは一般には「変なところ」というイメージが先行している感じがする。明るいところでやればそういうマイナスイメージはなくなると思うが。

委員：仲間作りの感覚として、ただ「～の趣味の人お集まりください」と言われても手を上げにくいので、「ボランティアどうですか」などと勧誘されて手を上げて登録してもらおうほうがやりやすいように思える。そういう登録制度を実際に運用する事務局があってもよいのだが、ボランティアの中で同じ趣味を持つ人が徐々に仲間を形成し、それがボランティアにつながるというのが自然な流れでよいかもしれない。

委員：「ボラバイト」という言葉がある。これはボランティアとアルバイトから作った言葉だが、その語が示すとおり、少しお金をもらうボランティアといったものである。1万数千件の登録がある。

委員：無償ボランティア、を団塊世代に適用するのは危なさそうだ。責任が今ひとつはっきりしないものになりかねない。きちんとしたコミュニケーションをとってサービスを提供するなら有償にすべき

だ。

委員：私はここに「災害」という言葉を書いてみた。これは、自分の経験によるものだが、例えば「ここにお年寄りがいる」などの情報は災害時には重要で、阪神大震災時に淡路島のある町では、「どこそこの家の誰々はどの部屋で寝ている」まで把握されていたため、97%近くの救助率を出したとか。瓦礫の下のどこを掘ればよいか判ったそうだ。これはどこでもできることでもないだろうが。いずれにせよ、日頃の「つながり」がいざというときに役立つようだ。

委員：企業でもそれをビジネスとして成り立たせようとしているが、うまくいってない。あるコンビニの宅配サービスの話だが、それは一人暮らしのお年寄りのために開発したにもかかわらず、いざやってみると、利用者は面倒くさがりの若年ばかりであったりするそうだ。企業と行政がうまくタイアップしていけないだろうか。

委員：武蔵野市では一人暮らしのお年寄りのためにいろいろやっているようだ。在宅介護支援センター、民生委員、近くの交番などが関わるようにしたり、ごみの個別収集などで働きかけたり仕組みづくりはしているようだ。ただ、団塊世代が年配になった時に、どうなるだろうか。

委員：サービスの提供者と受益者がともに団塊世代であれば、どうだろうか。

委員：今あるサービスについて、団塊世代がことごとくサービスの「受け手」になってしまうとサービスの担い手が不足してうまく回っていかなくなりそうだ。

委員：団塊世代が担い手にも、受け手にもなる。このアイデアを何らかの方面で発展させた何かしらが、「地域におけるビジネスモデル」に近いものになるだろうか。

委員：量的な問題、ということだろうか。今までのサービスが団塊世代にも適用できるか、という問題になるようだ。

委員：今、三鷹市では、市が運営するホームページ上で「私はこんなボランティアができます」などと登録し、利用者はそこから選んで様々なサービスを安い料金で使える、そんなものがあるそうだ。友達はホームページを作ってもらって1万円かかったと言っていた。武蔵野市ではどうだろうか。

委員：シルバー人材センターではやっていないだろうか。庭木の手入れとか.....。

委員：システムを作っただけではだめだ。「魂」を入れて、活発に運営しなければ意味がない。

委員：ところで、ボランティアとはそもそもどんなものだろうか。有償ボランティアなどの言葉が飛び交うようだが。

委員：全く無償のボランティアというのものもあるが、現在ボランティアを研究する分野では、広義にとらえ、交通費+お昼代+お茶代+お菓子代ぐらいをもらっても無償ボランティアということにしているそうだ。時間当たりいくら、などとなるとこれは有償ボランティアということになる。在宅介護などの方面で有償ボランティアという言葉が出てきたのだが、少し混乱を招いたので、今は「有償ボランティア」と言わないようしている。

委員：市が今まで「有償ボランティア」と呼んでいたものを組織化したほうがよい。市自体が、今のうちに、10年後すなわち団塊世代が60歳を超えるようになるまでに何かしら考えておかないとまずい。また、市に頼むだけではなく、我々も参画していかないと、我々の60歳過ぎが豊かにならない。武蔵野市が他の市と競争する時代が必ず来る。住民争奪戦とでもいうか、「自治体」が「住民」に選ばれる時代が来る。団塊世代が60歳以上になったときに、サービスが回らなくなってしまうような市には誰も住みたがらない。少子化を迎えて住民が減少する中でサービスを続けるには、「無償」であればよい、というのではなく、市として、もっと積極的に収益、税収をあげる、そういう考え方を

持ったほうがよい。

委員：ここで次第の3「その他」に移りたい。事務局、よろしく願います。

生活福祉課長：メーリングリストができた。電子会議室も開設したので、委員の方のご意見もよろしく
お願いしたい。市報にも掲載済。お手もとの団塊世代へのアンケート案について、ご検討いただきたい。

委員：量が多い。何人に送るのだろうか。

事務局：3,000人。半分程度提出されると回答は1,000人は超える。

委員：前文が重要だろう。前文次第でアンケート回収率が変わってくるだろう。

委員：こういうアンケートが送られてくること自体が、団塊世代に自分自身について考えさせられるきっかけにはなると思う。

委員：あまり細かいことまで聞くと、わずらわしさが印象づいてしまう。

委員：市政について聞くのはどうか。

委員：問いの数は少ないほうがよいように思える。

委員：ファクスだとやりやすい、という話もあるようだが。ただ、この枚数だと難しいか。

委員：解答用紙を質問の紙と別にしてはどうか。

委員：このアンケートの結果を受けて、われわれの意見交換にも役に立ってくるように思える。

あと、いくつかの意見・質問・回答傾向の予想などが出たが、その他何かあれば連絡いただくことで
了解をもらう。

3 その他

次回は平成16年2月26日(木)、次々回は平成16年3月31日(水)、いずれも午後7時。

場所は、事務局より後日連絡。